



新著聞集



究執奇

兼心怪

此以篇

四

至十卷

文學  
13  
73

~ 13  
1184  
4



門 813  
號 1184  
冊 4



新著聞集

奇怪篇第



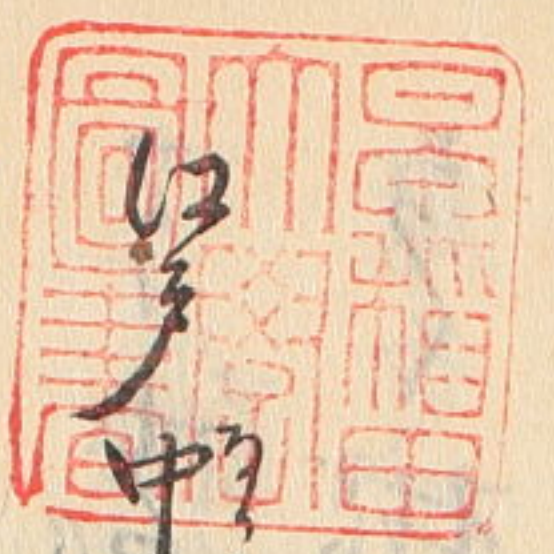
病床了猫来口  
 伽藍滅没す  
 四子と同産す  
 山伏夢に入子成す  
 化生夢入る  
 猫妖て女となる  
 薄了稻の穂を生す  
 祖母孫を噉す  
 妖猫友を誘ふ  
 異形の赤子  
 炬切名劍  
 形を體ちき妖者  
 幽鬼勘定  
 壯士童を引て谷に入る



婆了妖呼上妻了  
火車はまろて及て腰脚爛き壞石  
人活ちやい柳とかれ  
三子と同産了  
之燈は別院了天狗僕とらる  
真名古村蛇孫髪粘る  
葬処了雲中乃鬼の女と云  
夜陰茶亭了兩首出遊  
灰骸雲了今兩足と垂出す  
茶店の水碗了若の面と現す

熊野巖洞了大猫久しく棲  
蛇臺了て人への懐胎了始て知る  
吳形乃二子と同産了  
二蛇頸とほひ人家了寢す  
古狼婦とわけて子孫毛と被る  
面見了火車了  
幽冥袖とひく  
僧尸肉と噉ふ  
土家内了墮  
和泉小山取と更

淡路守 藤原 公成  
藤原 公成 公成  
藤原 公成 公成  
藤原 公成 公成  
藤原 公成 公成  
藤原 公成 公成  
藤原 公成 公成  
藤原 公成 公成  
藤原 公成 公成  
藤原 公成 公成



病床より猫まら

いづ中橋牧野乃中書み兼くよ都の石社のみ千  
室集の下女りく都一に何あるなく老る猫ま  
る枕より偉君あると人々いよせくおとせしあらしに  
離れり病入死すとひしくり方とるん矢作じ

祖母孫と敬ふ

上州麻橋より二里ぶつり備て一太胡村の名  
新大塚七之助とよ都乃母古才室集なるが三  
歳より孫と抱て昼夜寝るせしりあ

つと孫と噉ううとむかひのあつとてとるをりぬ  
七之助興とさぬく頓てうへて穿へ入しと  
り

伽藍滅没す

薩州白鳥山乃繁了真言宗の大寺なり  
天和三年七月上旬了佛殿のた一夜影しく  
震動せしと不審しく思ひてえまれとす  
了七のた大伽藍のたへうとせしと  
うく林ま一たものうとせしと堂中へ  
は

者立乃灰戸泥了返うてありしと太守の書  
納めまうと法花經八抽のま土中へありし  
地の端へ土竜のりちうとありしと  
地乃塵りしとゆりまめりしと

妖猫友とありしと

淀乃城下乃法善院の修了天和三年れ其  
病のりくお晩た不便とゆりまめりしと  
をまきまきと叫ぶと七八の  
飼とまきと猫火燧の上りありしと頓て

出て後をいへりありて大猫 匹まり  
して内に入り後をいへり大猫の上へ  
命の猫といへり今本納屋町へ  
んと互ちいへり今本納屋町へ  
加とすう海へいへり今本納屋町へ  
の猫といへり今本納屋町へ  
唯とすう海へいへり今本納屋町へ  
何れかの所へいへり今本納屋町へ  
猫といへり今本納屋町へ

まる取へりていへり今本納屋町へ  
カバ猫といへり今本納屋町へ

四子と産す

備後 神名郡 神田町 油や之を衆といふ者の妻  
四子と産す三子ハ男一子ハ女あり  
産す一ハ髪をかく生すといへり  
額に角三本ありしうばをろくして捨やりし  
す少くもいへり今本納屋町へ  
るハ和漢といへり今本納屋町へ

兵形の奇事

延宝六年、泉州さうひの夷嶋、一面三つ  
の足、ちろあつ、奇事とすて、至るしと大坂屋  
頓堀の老君、一どして、諸人、一とせ、ゆるし  
つ、兵形の者、一も、お、一、は、は、し、と、や

山伏、子、成、す

信州、山伏、一、山、一、は、一、と、一、人、一、  
一、子、一、も、一、痛、一、く、一、一、ひ、一、成、一、す、一、人、一、  
一、お、一、一、親、一、が、一、一、の、一、一、山、一、伏、一、来、一、て

頼、一、子、一、と、一、引、一、立、一、て、一、お、一、と、一、一、互、一、一、引、一、あ、一、て

山、一、伏、一、一、引、一、と、一、一、思、一、ひ、一、く、一、一、一、一、一、一、一、

一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、

の、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、

一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、

一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、

一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、

一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、

一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、

姫切名劔

毛利元就殿へ陰夜にたふし吉川元春はつと  
しに跡より元春乃娘あつとましつと頓々  
抜討り切きも外を足さやく逃れし其血を  
そいじくえあつたり逃め違ひて岩穴の中  
お入り地と堀をくして入りて女死して取りしま  
堀跡と姫切と名づる取持取りして吉川監物  
遺物として毛利元千代あへ贈らましつと  
化生あつたり入る

加賀の鉄炮組守村平左衛門うら夜夜るといふ  
何者やんまてたつと値し寝る上り押へ  
落して胸より下へあそあけ其苦いさ喻  
いん地を起つとんとする其重きり大  
磐石として壓るがどく苦じりあふ及い  
しうがゆあつたまゆもほろろぬ又次のる僕  
と夜さやまらも回しつと懺しつと村長あつ  
人々まりつと居あつたりなほのあつたの中  
あつたあつととしあつと怪しつと鉄炮してあつ





しく右ちりくくしきか戸半ゆてりしし  
百三尺をりの大は神所のをきしと何あど  
て機物やれも飛ひかまふ一筆のしとれ系  
六よとのへて扇をりしと鯛しとどりもせじ  
たくとち截ちりし何れは神く綿ちと切  
流しそくし妖者ちとめさうと聲と位しど  
かひ者ちとあは流ししとせしとまん  
指ちとあて女となる  
何れは神の息女の流見しとねえと女と都の  
子

しふ平法恩寺の内教藏坊肝表にてし  
扇をかよと跡ちと押ちし歌乃たともあし  
心ゆめどと断しとまのいしと産て仕し何あ  
と人息女の部屋とねとくねしと息女ハ寝て扇  
搦後とつちて君ちるが口ハ耳の根ちとまひて  
耳とちとしてあしとくせんちとちりししとか  
着仕とちしてハ悪ちとらんと思ひぬるやまらて  
扇ちとひとちとちと子細あまハ暇ちとすちと  
と何しし何ちと思ひと下あゆと今候ちと

かくら宣のりとさう人ひと顔色かおいろおもしろくかりあれを頼たのて援たす  
らちり切きましに大なる古ふる猫ねこうてゆりしそれ  
孫まごこのかきし一い作せ坊ぼく物もの鏡かがみのあふ草くさ紙しども多く今いまう  
りしとるん

坐ま翹たか勘かん定てい

越前宰相殿えぜんさいしやうだうの代しろ友とも野の本ほん孫まご以もたありし後ご代だい先せん  
身みがましく物ものとさう奪うばい勘かん定てい立たびいさしめて  
今いま浪なみ法ほう及およびを跋はくち不ふちくさう上うへ妻さい子こハ追お放はなみ定ていり  
しおるつひの下女したんな物もの託たくて我われハ孫まご以もたありし代だい

の奴やつ京きやう私し教くわう了りやう思おもひをまけ家いへと死し例れいし結むすば  
と少すくまりんこせしり無む念ねんありしあすもやうん  
勘かん定ていすへきを目め付つ江え人ひと誰たれ彼かと呼よびてたのく  
拓たくきりめしてその懐いのわら用もちひる也なり地ぢを元もと  
出でて勘かん定ていしそあるし露れも遠とほくハげし  
初はつハそよをさうりいさ飯いるをそ枕まくらにふせ二ふた日ひ寝ね  
てお託たくすめしりちり主ぬし房ぼう物ものよそ急いそぎに涙なみだまを  
流ながすちあな生なまりすじも愛あいするりしけり  
宰相殿さいしやうだうきしめし舞ま舞まいのあうとて踊おどを

まてめら〜お増りま〜とや

薄稲の穂を生す

天和三年の秋伏見の幕府破りて多かりといふ者の  
庭の落し稲の穂生〜あり人々及て奇美  
乃り〜とやせ〜

壯士童と引て登り入る

江戸坂所一町目の横吹や町〜して十三番〜  
なほ何う者の子は〜ハお月うらぶ常盤橋にて中  
小姓〜と〜者二人は袴と撥山所のらんまで

お〜れよ何も何〜はとて金々お〜とせしうはあま  
物〜を拾ひ〜今お〜は〜よとて又〜分〜れし  
や〜くひ〜と〜も〜や〜ん〜と〜今〜お〜り〜は〜とて  
又〜分〜れ〜本〜庄〜の〜家〜を〜ら〜ま〜よ〜お〜て〜頼〜て〜判〜切  
と〜出〜〜お〜る〜と〜ま〜ま〜と〜代〜と〜ま〜ら〜と〜と〜呼

ハ頭〜と〜と〜引〜ま〜て〜お〜り〜に〜力〜な〜く〜連〜ら〜れ〜て  
〜く〜〜三〜日〜終〜て〜家〜分〜の〜奥〜う〜り〜奥〜う〜り〜あ〜い〜う〜て  
影〜し〜ま〜家〜君〜わ〜り〜め〜ま〜ん〜人〜わ〜り〜男〜の〜怪〜者〜あ〜り  
唯朝夕〜血の〜行〜る〜葛籠〜袋〜包〜ら〜と〜夕

もち運こみ其むを海うみへと云いふのうらなくたはゆれど  
所のべや方かたもあつたれを恐おそくしつとまよふ  
言ことの趣おもい三さん息いきを成なて下くだりつる男おとこ件けんの童わらわに  
母ははハ不便ふびんのゆりま意いをよ抱かかり憂うれひあふまに  
お母ははハこれより身みを買かひておちりなほよゆり  
くハ今日の意いをよ抱かかりこの救たすめ因よりかされらよ  
追おひつりぞおゆりてゆりお返かへりまよせんや  
ままくしつり物ものくらう噪なき言ことを遅おそくマ待まち件けん乃なり  
まより隠かくりしうたスハけ童わらわ欠か落おりしつり

追おひかまよしなつり誰たれハ二人ふたり候まをまにハ件けんの男おとこ  
とけりしと兼かへし云いハハヤリ救たすめ乃なり中にゆりまつと  
漸おきつりゆて鯛たい釣つ舟ふね乃なりまじしてまよひ意い苦く杯ぱい  
引ひらふ事ことおの海うみあつと推お出だし日本にっぽん橋はしにまよ  
是こゝよりを疾はやく疾はやくまよ某たれ送おくり度どハおちりし  
たつまハ端はたにまよあつりものゆりまよおのゆり  
かの童わらわハ宿しゆくりゆりある親おやも初はつめを初はつめしつれ  
後のちつハ物ものよまよしつれあつらんと意いをよ  
矢やしつ日ひと命いのち日ひつりあつらあつら思おもひのゆり

白くありとて悦びへるも限らぬ一寛文十年此  
るはてはつし

婆小妖呼し来り忽ち死す

江戸八所堀二町目新がびのや甚き病といふ者あり時  
客と知り居ありて一六午汁の焼置も扱へ  
中々の口くきくづといふ甚き病ひいふ来り  
これくゆりや招く下人たえして六何者もねん  
これて引立追放つて来り甚き病にいらぬ此  
何しとて絶てありと業行などかりく用

ありて更り後りして其言ふに身海りし  
其焼ハ何れいふる者といふやと云は空みこの  
るはてはつし

火車の来るとして腰折爛壞

武州騎西の所より追き妙願寺村に泊り安ん  
やよ者ありし時不意大及へ飛出やと火車が  
来るはと高声なり呼て倒き一家庭内周障て  
出せぬをふ能く物ともいひでそれなり煩つき  
腰より下腐れもま十日計して死あり



墮ちたるものやしてそれより是非なくし去(あ)はれぬの  
倒(た)ぶらぬとなく藻(し)の鱗(う)ちととの食(く)らじきり  
其(ま)後(ご)人(ひと)より託(たく)して我(わ)子(こ)やかくおされ大(お)定(ぢやう)けりる栖(す)居(ぐ)  
るより少(す)く迷惑(めいわく)せしめぬおぼやかすぬいと定められ  
るぬとく口(くち)をしりまされぬ取(と)り者(もの)ももとの此(こ)の原(はら)  
の者(もの)のちねを一人(ひとり)か不便(ふびん)なりけり小(こ)き  
祠(ひら)とまて地(ぢ)河(が)の稻(いな)荷(か)と祝(いわ)ひあるとあり

三子と同産下

江戸西(にし)の久保(くぼ)天(てん)徳(とく)寺(じ)門(かど)前(まへ)之日(ひ)傭(よう)と業(ごう)とすれ

昔(むかし)あるといふ者(もの)の妻(つま)三(さん)子(こ)を産(う)み元(もと)禄(ろく)十(じゅう)六(ろく)日(にち)の三月(さんげつ)  
廿七(にじゅうしち)日(にち)同時(どうじ)に三(さん)子(こ)を産(う)み其(ま)のく生(な)れたるより  
健(た)るる男(おとこ)子(こ)はてはりりる中(なか)の子(こ)ハ双(ふた)の耳(みみ)とされり  
りマ(ま)がくひいぶらるる名(な)とハ三人(さんにん)はらぬて三(さん)羊(や)惣(そう)と  
付(つ)けり三(さん)子(こ)を産(う)むるハひりりあるは天下(てんか)の吉(きち)きりて  
りりしりりて行(い)儀(ぎ)より後(ご)人(ひと)より後(ご)行(い)儀(ぎ)より色(いろ)いじく  
行(い)儀(ぎ)より色(いろ)馬(うま)目(め)中(ちゆう)費(ひ)よりりりしり地(ぢ)内(うち)を人(ひと)ハ  
回(まわ)りて斯(ごと)くあり

高野(たかの)の別院(べつゐん)より天狗(てんぐ)僕(が)とあり



高野山金剛三昧院の下人三々もなるとはとあり或  
時住持の僧他出たりしに雨風をゆくゆくしお下人  
ひうひうまるとして抛灯をかりあくる具のさざれ  
をひくせんをとりしと若くやういさせを毎ひと  
一向にすべし程よりマ橋ハ橋よとてゆりけしに  
風ぬすじしも障るげししこの僧下人二むひ其の  
方ハ直人よりハりし隠されなるとはハ今ハ何ぞ  
ゆくそちん我ハ門前の松と楓とに候く天狗あり  
行跡の行跡貴く候し中一仕候し今ハ何寺に

火難はくちと云て飛りぬ

真名古村蛇孫髪粘る

紀伊國日高郡真名古村ハ真名古の在り候し  
取らりあ村ハ蛇の子孫ありとて隣ハ隣村より婚  
姻と結ぶれを立所のおりハ縁の及来るりなし  
其中一往古より蛇身の女一人あり候し生るるの  
今不詳にてはゆりまなく其容貌千人よりすれ  
髪ハ女の長よりありて地と雲の月影の墜栗花より  
入ハ伴の女の髪はより粘りてさるものちやくと

ぬるもつま合て櫛の歯もさし陸栗花のまて  
つるの川をて洗つ忽さらやうと成てんく  
と解るなりけ女八目村にも連値男なきは

葬取つ雲中の鬼のよと斬とる

松平五左衛門殿は衆の葬れつ雷電四方に閃き  
龕の上つ黒雲のしとみちる龕つを掛  
うひえんふつ怒のよれと成る雲の中  
たり捨つすやと接うらにうまハ女成して  
雲くまぬ跡とえんを血ねびしく流さる

其中に怖ろき血三つ付の奈つ銀柱をすう  
うへうの毛生る物切たしうせれうこの  
刃と火車切と名つあ五つ所りしと後後書と解に  
うて其引出物つとつれと後後書と解に  
あを恐むやうてはうりあるとせ

夜陰茶亭兩首出設す

能登日向を交ま級の首途と松平のあさま(答意)  
まぬりうあまて燭と立て用よにり海に  
引よとえんハ葉やのましが内と火燃一は夜陰子

万もきく鳴らさつともをうれを未の首と増さる  
首と出ッするを不審す一おひし子息は左の首を  
畔所をえりしとてし深す一是居成るのそりそ  
別えりしとてし深す一是居成るのそりそ  
内よりしし火も徳件の首も又一内にて隈く  
ちりて居居がさるれ光やしき物も又一はまゆの椽  
の遠くはりてちりしとてし深す一はまゆの椽  
狸の首考りしとてし深す一はまゆの椽  
ちりしとてし深す一はまゆの椽

灰骸雲了入り兩足とれ出す

寛文七年閏二月六日俄く雷はかりき  
ふくは牛也の者死てま向の格霍れ焼場に送り  
しに馬雲一しりすひ下り籠乃上りやゆと馬ハ  
灰骸をま中に提あ入りあのは足雲は中をざく  
とちりししや法人えはり

茶店の水碗着の面と現す

天和四年正月三日中川佐渡守を紀ふたりせり  
休く堀田小左衛門と人はいり白山の茶店に

立より休むいゝに石仕の園内とよ者水で飲るるが  
茶碗の中へ最麗くも着物の敷るのまゝ一に  
よせくおのひ水ですく又汲み取の又くしに  
是非なく飲てくまぬ園内が敷るく着るまゝ  
庭の初を色はくす式部平内とよ者之園内  
おろも全く我ハ多く飲るに相表の門せハ何して  
通るまればく不審き物なり人々の何れじと  
おのひ扱うらふおられを逃出さしと着るく庭  
いろに隣の境までおてえりしなり一人お合ひ

其由を向いおぬがくしとてぬやもぬ聖晩園内  
おんとして人来る誰と問ハ式部平内が使ひ松岡  
平藤屋村平六土橋又藤とよ者ありとよひよりして  
ゆいりしものをいりるまてくおかくともよを身せる人  
いへくぞや病のまゝ生る湯浴くまゝ来た十六日  
おゆりるんま付恨とてくべくまよとよれをゆく  
あつげらま形あり園内おぬくそお給とてぬ  
きうろくまは逃て件おぬとて隣の縁に  
飛つがまて失ゆる後又も来るに

紀州 嵯峨洞 大猫 久しく棲

紀州 嵯峨洞の山陰の洞に虎のくまの獸住て  
里乃 大狐狸をて捕りて數人にやうび人も  
遠きれを里人殺絶して其ハ是疾 嵯峨洞 小僧  
まぬ 或者竹の串と輪とを振つてまゝりらとて  
穴のあつて神とまゝにこれにやうに倒まて驛ま  
しつて 捕る竹串れをもちまゝにこれにやうに  
うは 大なる声して鳴りて去所もひびきしうは人  
りまゝに出入お報くもり 猪やうりし 大猫とて

ゆりし 身享三の海のものあり

能變 ども人よ支り 懐胎して初て知ん

豫州 宇和郡 益田村の庄やまゝ未進のうにけり  
一里半隔り 城下つてまゝに逗留せしに  
宿へ入あつてに 支つてて女房と目し 床に卧ぬ  
女に 一めハ其の男ありとありひに 後懐胎して  
死し 懐に 候つて 蛇まゝに守り 君ありて  
人々おらるる 遊りてセハ 病人 され 報す 由り  
をとりやうや 産とてに 繩の糸つて 候まて

蛙の子に齊ひそ一ひとき約ひと一ひと斗とどりり戯あそで或あるなり  
かの女を病を申し下を女をよをりししハ吾が夫をあをくぬる  
となりししにまつりのりて蛇了りてりしとあり  
ぶらのり乃をりしりし我がハ活るが畜を生を了り  
墮おんとてほるとりや

吳い形がの二子と同と産ん了り

奥おく州しゅう南なん部ぶ盤ばん石せき乃を妙めう泉せん寺じの内おの百ひゃく姓せいの妻  
延えん室しつハの乃をりし夏なつの比二に子と産んを人ハ片ハ長く足  
やめりし身をに毛髪をてりるが猿えん猴こうの一と一まりハ

目め鼻びりしてよさり足あし四よ十じゅう三さん本ほんりししハ何なに矣や流りゅうりり  
よのハ恥とりるセハ跡の考りきと捨りして或人ひと  
茶ちやい又んとて乳と飲せるハ不み亡自じ強きやうて三人にん  
不ふ成じやうりり

二に蛇へび頸けいと海人ひと家か割わりと愛ず

阿あ州しゅうの二宮みやと美とよ人ひと薩さつ十じゅうハ使者しやにゆりに  
目め向むかの處とて妙めう言げん一ひと命いのちとやりるに因の法令れいと  
とて信しんりししハ考かん考かんりてりマ一ひとおのおの家か  
了りも夜とてりとりハ家かとり人ひとい返りし信しんりり矣や

いさゝかやうく一歩で何とやらをさへ通へて内よしのきぬ  
亭主使と出でていさゝか出見見舞う入くはたは  
重なるかゝらしてかかへてまゝにやせまへう  
け物通をもつてまへへと強う云へうは寢室に  
入て又々に色艶あつた男お出厚くまゝのあ  
身に海しきりけし息とまゝにの世あはん  
ハ世あはんまゝのあはん御のあはん御のあはん  
又もはつちへん御のあはん御のあはん御のあはん  
やあはん御のあはん御のあはん御のあはん御のあはん

頭とまゝに御のあはん御のあはん御のあはん御のあはん  
又もはつちへん御のあはん御のあはん御のあはん御のあはん  
あはんに十八九の女二人双亡とちかたしよの  
鏡ハとれり女の執心とまゝに御のあはん御のあはん  
一丁の鏡とまゝに御のあはん御のあはん御のあはん御のあはん  
まへに息とまゝに御のあはん御のあはん御のあはん御のあはん  
今もいふ不思議のあはん御のあはん御のあはん御のあはん  
りせまの御のあはん御のあはん御のあはん御のあはん御のあはん  
そゝまゝに御のあはん御のあはん御のあはん御のあはん御のあはん

睦なごしくて翌あした朝あしたつるぬぬ久美使者きよみしやをほめて  
所ところよ一ひとれとももんそかのをあらうとて地の家  
とたつてきよとふれを大きなる割わりとありぬ  
不ふ審しん了りょうつちのいて里人りじんを向むかへて  
宿しゆくめされ後三日ごさんじつ後ごてその取と地ち震しん風ふう大だいなる  
たぬ紐ひも解とけして今ハ世よ色いろに北きた中なかをとなり  
して一ひとふもやとおしゆしてれをまふやしき  
政せい多た下げり河かのいり家いえをいりし里女りめまも  
たつたたつたたたたたとさしし

古ふる振ぶ婦ふとつりて子孫こまご毛けを被ふる

越前えちぜんの國くに大野おほの郡ぐん菖蒲しやぶ池いけの傍かたはらに河かの河か振ぶ群ぐん  
出いて目めをたてハ人のやい絶とつりして河かの傍かたはら菖蒲しやぶ池いけ  
の孫まごをたてた心こころげして城しろよなりいのかるし振ぶ  
とやい出いてちよみとまひがやうしうは高く大おほき成なり  
よよとつて一ひとかたのらまをいしありてし振ぶたよお  
下したよありまうして面おもてうらめをてちりし君きみをたがの  
菖蒲しやぶ池いけの孫まごをたてたやいとまひかんは  
たつりともたつりしむを大おほなる振ぶまうてはくし



え何ぞ我と肩車<sup>かたぐるま</sup>を<sup>し</sup>上<sup>の</sup>の<sup>こ</sup>り<sup>を</sup>コソ<sup>の</sup>と<sup>我</sup>も  
け<sup>を</sup>毛<sup>と</sup>股<sup>を</sup>首<sup>と</sup>と<sup>け</sup>入<sup>に</sup>上<sup>る</sup>既<sup>に</sup>  
傍<sup>の</sup>側<sup>り</sup>く<sup>に</sup>座<sup>す</sup>は<sup>も</sup>傍<sup>り</sup>の<sup>傍</sup>入<sup>る</sup>  
少<sup>く</sup>少<sup>く</sup>と<sup>後</sup>指<sup>の</sup>中<sup>に</sup>と<sup>は</sup>も<sup>も</sup>丸<sup>を</sup>同<sup>じ</sup>  
と<sup>ず</sup>と<sup>落</sup>て<sup>と</sup>く<sup>り</sup>も<sup>も</sup>あ<sup>り</sup>も<sup>も</sup>傍<sup>り</sup>く<sup>り</sup>  
の<sup>傍</sup>孫<sup>を</sup>の<sup>の</sup>洋<sup>す</sup>く<sup>に</sup>妻<sup>の</sup>末<sup>に</sup>け<sup>る</sup>  
傍<sup>り</sup>の<sup>死</sup>骸<sup>を</sup>と<sup>れ</sup>を<sup>大</sup>の<sup>狼</sup>少<sup>く</sup>と<sup>て</sup>五<sup>に</sup>  
と<sup>れ</sup>狼<sup>の</sup>子<sup>孫</sup>と<sup>あ</sup>り<sup>し</sup>も<sup>も</sup>昔<sup>に</sup>狼<sup>の</sup>毛<sup>に</sup>  
と<sup>け</sup>し<sup>り</sup>し<sup>と</sup>あ<sup>り</sup>又<sup>に</sup>土<sup>佐</sup>是<sup>の</sup>傍<sup>り</sup>の<sup>狼</sup>の<sup>傍</sup>  
と<sup>け</sup>し<sup>り</sup>し<sup>と</sup>あ<sup>り</sup>又<sup>に</sup>土<sup>佐</sup>是<sup>の</sup>傍<sup>り</sup>の<sup>狼</sup>の<sup>傍</sup>

かくそ是に落たがハ何々の何々

面火車と鬼形

雪親乃下女小西京の者何しと夫の伯父承  
灰すべも七日あう青き糸き鬼形の者来るハ  
ヤき怖るしヤリと云て泣くを車ヤリのはし  
七日了あう日何々々々其火車に坐るヤ  
ヤリヤ免しと云て合せ足下りと云し  
鬼形何しと云すもヤも鬼形もなきもの  
とて久しく腰のまげりし不器立て走り出門口の

後君一はまづき倒まて死すし

生霊袖と泣

江戸柳原のほや松と云ふ者其妻天和三年の廿  
身海よりしすまのち夕暮ふ生霊のうらみ  
下女が袖をひきしなゆきやと伏倒しを  
叫ひしす驚き人あてふれハ絶死す  
水と地をぎ呼あんに幸しくて蕪はし  
かまが序油引切てらるしうは不審くて聖の  
妻乃塚す詣て及れかの袖石塔乃上に

かろそをりしとらり

僧尸肉を噉ふ

増上寺塔中より徒水院へつる時京都と流きま  
体浴利髪はめてもまのしと同省の僧髪を利何  
ち何や海りて一丈をらまきり離して甚く毒  
しけり詭をうそとあらんも口惜とおのひ  
筋ら口の肉へみし隠さんとしるりて其の味は  
く下して細くくひらうそれかめ凡味お  
毛志まうしておよみ穿りに堪りし裏の墓

取<sup>と</sup>り<sup>の</sup>恐<sup>おそ</sup>ひ<sup>の</sup>ゆ<sup>て</sup>土<sup>つち</sup>を<sup>り</sup>り<sup>て</sup>一<sup>い</sup>華<sup>か</sup>に<sup>あ</sup>る<sup>は</sup>の<sup>ま</sup>は<sup>ら</sup>る<sup>る</sup>  
切<sup>き</sup>り<sup>の</sup>歌<sup>うた</sup>一<sup>い</sup>の<sup>ま</sup>に<sup>あ</sup>ら<sup>は</sup>に<sup>あ</sup>ひ<sup>り</sup>れ<sup>ば</sup>心<sup>こころ</sup>の<sup>ま</sup>は<sup>ら</sup>る<sup>る</sup>  
西<sup>にし</sup>の<sup>ま</sup>は<sup>ら</sup>る<sup>る</sup>一<sup>い</sup>の<sup>ま</sup>に<sup>あ</sup>ら<sup>は</sup>に<sup>あ</sup>ひ<sup>り</sup>れ<sup>ば</sup>心<sup>こころ</sup>の<sup>ま</sup>は<sup>ら</sup>る<sup>る</sup>  
難<sup>なん</sup>し<sup>の</sup>業<sup>わざ</sup>せ<sup>し</sup>一<sup>い</sup>の<sup>ま</sup>に<sup>あ</sup>ら<sup>は</sup>に<sup>あ</sup>ひ<sup>り</sup>れ<sup>ば</sup>心<sup>こころ</sup>の<sup>ま</sup>は<sup>ら</sup>る<sup>る</sup>  
丸<sup>まる</sup>の<sup>ま</sup>は<sup>ら</sup>る<sup>る</sup>先<sup>ま</sup>肝<sup>かん</sup>ひ<sup>て</sup>ひ<sup>を</sup>や<sup>り</sup>波<sup>なみ</sup>の<sup>ま</sup>は<sup>ら</sup>る<sup>る</sup>  
乃<sup>の</sup>の<sup>ま</sup>は<sup>ら</sup>る<sup>る</sup>一<sup>い</sup>の<sup>ま</sup>に<sup>あ</sup>ら<sup>は</sup>に<sup>あ</sup>ひ<sup>り</sup>れ<sup>ば</sup>心<sup>こころ</sup>の<sup>ま</sup>は<sup>ら</sup>る<sup>る</sup>  
映<sup>えい</sup>り<sup>の</sup>や<sup>り</sup>斗<sup>と</sup>心<sup>こころ</sup>を<sup>や</sup>り<sup>て</sup>押<sup>お</sup>し<sup>て</sup>余<sup>あ</sup>り<sup>の</sup>ま<sup>は</sup>ら<sup>る</sup>  
し<sup>の</sup>ま<sup>は</sup>ら<sup>る</sup>一<sup>い</sup>の<sup>ま</sup>に<sup>あ</sup>ら<sup>は</sup>に<sup>あ</sup>ひ<sup>り</sup>れ<sup>ば</sup>心<sup>こころ</sup>の<sup>ま</sup>は<sup>ら</sup>る<sup>る</sup>  
ワ<sup>わ</sup>の<sup>ま</sup>は<sup>ら</sup>る<sup>る</sup>一<sup>い</sup>の<sup>ま</sup>に<sup>あ</sup>ら<sup>は</sup>に<sup>あ</sup>ひ<sup>り</sup>れ<sup>ば</sup>心<sup>こころ</sup>の<sup>ま</sup>は<sup>ら</sup>る<sup>る</sup>

土家内<sup>つちけ</sup>の<sup>ま</sup>は<sup>ら</sup>る<sup>る</sup>

大坂<sup>おおさか</sup>立<sup>た</sup>賣<sup>う</sup>堀<sup>ほり</sup>中<sup>な</sup>橋<sup>はし</sup>所<sup>ところ</sup>一<sup>い</sup>の<sup>ま</sup>に<sup>あ</sup>ら<sup>は</sup>に<sup>あ</sup>ひ<sup>り</sup>れ<sup>ば</sup>心<sup>こころ</sup>の<sup>ま</sup>は<sup>ら</sup>る<sup>る</sup>  
檜<sup>ひの</sup>物<sup>もの</sup>屋<sup>や</sup>所<sup>ところ</sup>一<sup>い</sup>の<sup>ま</sup>に<sup>あ</sup>ら<sup>は</sup>に<sup>あ</sup>ひ<sup>り</sup>れ<sup>ば</sup>心<sup>こころ</sup>の<sup>ま</sup>は<sup>ら</sup>る<sup>る</sup>  
空<sup>くう</sup>地<sup>ち</sup>一<sup>い</sup>の<sup>ま</sup>に<sup>あ</sup>ら<sup>は</sup>に<sup>あ</sup>ひ<sup>り</sup>れ<sup>ば</sup>心<sup>こころ</sup>の<sup>ま</sup>は<sup>ら</sup>る<sup>る</sup>  
粉<sup>こな</sup>土<sup>つち</sup>少<sup>すく</sup>し<sup>の</sup>ま<sup>は</sup>ら<sup>る</sup>一<sup>い</sup>の<sup>ま</sup>に<sup>あ</sup>ら<sup>は</sup>に<sup>あ</sup>ひ<sup>り</sup>れ<sup>ば</sup>心<sup>こころ</sup>の<sup>ま</sup>は<sup>ら</sup>る<sup>る</sup>  
一<sup>い</sup>の<sup>ま</sup>に<sup>あ</sup>ら<sup>は</sup>に<sup>あ</sup>ひ<sup>り</sup>れ<sup>ば</sup>心<sup>こころ</sup>の<sup>ま</sup>は<sup>ら</sup>る<sup>る</sup>

おちりて又くしりて終りあるとあり

和泉山山跡で又

泉洲は根敷とぞしりふ石より周り三四所の小山あり

え縁よりめの比よりなるより何となく鳴ひきて

丁七日了り却り山のよれ松葉のの流木又平ら

あがり懸相つしおろろ少しも損ず

り三町なりおの松へはりしり目し

大なる山ありて一帯ありて

新著聞集

執心篇第十一

妬女鬼と成る

僧の遺財を貪りて漸て家をやく

悟夫財を貪りて帯忽ち鈍となる

亡鬼鐘となる

妬女妻を憎り念佛忽ち治す

後母娘のなり家と成る



隣の者も走りよるに木の葉蔭園をよみよ  
あきせせ人形あつらひをいりて急ぎ出せし終り  
推殺しておろしけりしはまを木の葉蔭園と取れらるる  
いふせりしをれをまを深き長櫃すりおひ  
寺におろししとせこれよりまもるひの心よめて  
煩ひしは百日をわたりぬ後すりまをりし  
僧の速成と身なりと成てあそびく  
いふる雑司谷の名を子とて人のしは嫡子ハ出家  
して真言宗の學に通じけり寺にお入て修持

と殺害し其跡に多の金銀財宝ありしを代官の計  
ひとしと僧侶の兄弟あり分散してそとせり  
ある朝弟が馬屋の内悉く火にまじりて娘入て  
親より告驚き、それをみ軒に炎うけりて焼  
失してりり其次の弟が家よりハ急ぎ火の玉をい  
火がらと隠れり跡が急ぎは壁の間より燃ゆる  
らまをけりおのらるるハ丸座なりしがほおし  
をりへりて又焼ゆりし又次の弟が家にも  
火の玉をいりてそとゆりよの内で燃ゆて焼

ありしにちく鬼ヤせん角ヤせんをてりし  
聖く神社佛院を願てきてかの傍の跡を  
念ふるす吊くうは終るし恙なく作りし寛文  
元徳のころに被傍財宝す甚く執念を  
まゝ一念火災となりかく災にまじりて  
人々驚くをてりし

悟夫賊と貪り帯をち海に蛇となる  
江戸小傳馬町本誓寺住持妹婿のちある寺に  
門ありて春米屋とあり寺におありの所を

擲て居てちとせし餘り多れ居るし  
寺より少袖くちぬちと贈まは頓て賣て代  
ふすや人とありて争で角はもる地と向はつて  
きくハハぬ也出令しち新れし恙なくして  
はるひの者すハ朝夕も春米れめんさいとてま  
於茶ありしと食セヤき法の外ハ自分にも食セ  
かく辛く何もまじりて定め令せりし是是非  
なく善事のありしとてかくをり悟くせし  
富限より銀二十枚月箱と寺の土蔵ありあり

よく其志のあらはしきと長老も笑止るなりし  
時、教化せしむるがも佛居るおぼくの心  
痛むやうもあらるし、口仲しむる苦  
しきやうがらるるし、うは養生のたして妻子を  
引はき寺にひいて看者せしに朝より夕まで  
また隣子と唯土藏のたうも足右て口を  
何の内乃金とすてく、あす（き）の泪とちが  
け、あつとも供佛、施捨もさうぶ、あつは只牌お  
り、金箱と玉べし、て云し、の既る、條終に、

て枕えり、と紀至、帯もちぬち、蛇と成て、旬  
歩しと長老、法解了、包し念佛と書て川へ流さ  
きて、せれ、う、條終とす、い、ま、も、耳にも、あ  
ま、して、只、金、の、の、を、と、云、て、は、の、う、墓、ら、く、さ、し  
は、流、ま、せん、と、て、裸、了、り、て、え、ま、が、下、帯、解、了、  
き、う、て、腰、を、ぬ、き、し、う、と、ぬ、く、に、放、し、華、し、あ、り  
し、の、悪、人、の、自、他、懺、悔、の、あ、り、と、て、便、所、後、義、の  
あ、り、と、流、さ、ま、し、と、親、あ、り、と、す、け、り、と、

止、鬼、鐘、と、なる





うらもいとまの大方の蠅一ツ飛来り九条兼実婦に  
あつたその飛返りもれどうもく多く痛まぬ  
やうに捕へて他へとちやうに中二日寝させて  
飯もあれどおき移しての裏なる言能川のあふ  
故一もんに又飯をぬりて家の者もこれの  
玉り止菓ちんと口ずかすもれど主人もあや  
ふにちひひあやうにせんそお先で少く切て  
取と隔て飯一ちんけ蠅又飯りもりあやうれ  
不思議さうけいひのあやちと紅一筆で綴ら

あつに印きくはくそ又飯もあれど今も夫婦の  
者も興はあつてやかく思ひとかり日外あや  
一銀のりやちひか一是う執着せしもれ  
赤の進言ちんごあつ免に角不便了ちひ  
いせんそ思もあつに伯母の後世の及るの  
者のぬりちんけしうがやの者のあつた  
の恨やハ貴き寺人も上あ回向といふあつた  
日以飯依しあつたあつたの通西軒自空  
上人とあつた者ハ宗門あつたあつた山の瑞光寺

慈明上人といひぬ寺へ移すめまゐりて子細と具  
了すよもして二月廿七日の集が弟勤を度つて中  
少め幸の日の午ぬけりてつらぬれをきく今  
悔いごとく中澄しあるまゝなり今もておぼり  
あつ蟻何とてし左目あつて自滅しあるは  
これ一月たりねどあまのく寺矣の好ひまじ  
らんとも箱たりて通西軒へ移るし始終に  
法を律師もつりて思ひし蠅ふ加持  
土砂せうりあまのくぬひ龍飢鬼をせんん

修し右乃信施ハ永の資堂にをのしませあり  
瑞光寺の上人への法我矣とれたの親切られ  
あつ蠅とせりし供養とてあまのくぬひ  
浄人惠雲法師ありおまのくぬひ妙典ハ猶  
讀誦しきぬひ則山上へ法乃とてに葬せぬひ  
率都婆ちとて立させ聖日にも又回向のあふとて  
きぬふりて塔安の證ありほふし細き空ありぬハ  
上人も不思議ありて是く塔せりるに呪の埋せり  
きく蠅とてあまのくぬひ大徳の追をに

速疾生天せしむれどまがくくをゆりしと後  
の薬源薬へ来りたの以薬蠅来るはあましくも  
希至のよりしてありしと語りありとあり

妬女妻と惱し念佛をもちまら治す

寛文のころ阿州英馬郡貞光といふ取のちらうや  
某氏の家来七葉といふ者と傳單に粟といふ女と  
夫婦に納ませしに又其隣の娘を人の媒りて  
七葉妻といふくく粟といふと深く憤り村の  
乃舟の根村の薬師と祈り佛の眼耳鼻三取を

打とありぬらうし七葉の恙なくして素に  
生高かてまゆく惱しありぬらうし山ぶくありし  
集りて祈り加抄をたはんに験しありしに三  
と経て既しぬらうしぬらうしぬらうし比服村の東林寺  
周警りしけりしと語りしにまよふいと安きるとし  
病人の枕し候しつら聲に候し念佛せよとて十念  
授ちしぬらうし即癒し脊かたりしとてとて念  
よりこびりぬらうし三日のる精進して経念  
せりぬらうし血脈授ちぬらうしと終はぬらうし



後娘のなり家と執る

浴湯一糸了備後とよ系人おに左近とよ  
者あり継母の腹了娘三人ありしが母をい詔へ  
らく左近とよありこれけ跡ハ二人の娘おの  
嫉こしに母煩てぬれ三日あり左近の継母  
乃まりとぬへるいと云て絶めて終了身成りし  
又三日あり左近の妻ありしけやまおや  
姑の縄を以て我首と云ふんとすうはいくさん  
懐ふや堪やと叫しと其伯父なる五條の

宗仙寺の東堂血脈を調へ姑の嫁了おさめて吊  
りしはまらちまらに病腦るるくちりし

新著聞集

寛龜篇第十二

幽影屢<sup>ゆい</sup>所<sup>しよ</sup>り<sup>り</sup>九<sup>く</sup>敷<sup>しき</sup>人<sup>にん</sup>あ<sup>あ</sup>く<sup>く</sup>く<sup>く</sup>見<sup>み</sup>る

炊<sup>くわい</sup>芥<sup>がい</sup>茅<sup>ぼう</sup>と<sup>と</sup>生<sup>なま</sup>く<sup>く</sup>菊<sup>きく</sup>寺<sup>てい</sup>懸<sup>けん</sup>燈<sup>てい</sup>

息<sup>いき</sup>女<sup>にょ</sup>ひ<sup>ひ</sup>く<sup>く</sup>く<sup>く</sup>出<sup>で</sup>像<sup>ざう</sup>と<sup>と</sup>又<sup>また</sup>て<sup>て</sup>忽<sup>たち</sup>ち<sup>ち</sup>灰<sup>はい</sup>す

怨<sup>せん</sup>念<sup>ねん</sup>と<sup>と</sup>戦<sup>せん</sup>い<sup>い</sup>卒<sup>そつ</sup>て<sup>て</sup>脊<sup>せき</sup>の<sup>の</sup>上<sup>の上</sup>に<sup>に</sup>被<sup>ひ</sup>レ<sup>レ</sup>疵<sup>し</sup>

夫<sup>そ</sup>妬<sup>ね</sup>妻<sup>さい</sup>の<sup>の</sup>怨<sup>せん</sup>影<sup>えい</sup>と<sup>と</sup>又<sup>また</sup>て<sup>て</sup>ほ<sup>ほ</sup>お<sup>お</sup>り<sup>り</sup>灰<sup>はい</sup>す

灰<sup>はい</sup>尸<sup>し</sup>人<sup>にん</sup>ア<sup>ア</sup>ア<sup>ア</sup>ア<sup>ア</sup>念<sup>ねん</sup>と<sup>と</sup>告<sup>つ</sup>

勇士<sup>ゆうし</sup>の<sup>の</sup>凶<sup>あつ</sup>龜<sup>いん</sup>倭<sup>わい</sup>人<sup>にん</sup>の<sup>の</sup>く<sup>く</sup>く<sup>く</sup>と<sup>と</sup>恨<sup>うら</sup>む

*[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]*

亡妻安を現下

活部喉で

先丈招呼はおに成す

先妻鬼とらうす

恨る婦鉉とるる潜妻家と去る

継子母了還ひ恨霊子と惚す

妻の鬼追来り因了飯

淡路藩の... 徳川幕府...

幽影屢何れ数人悉く見る

久保吉左衛門殿右近の兄小姓所もる科了

殺害せりけりは... 母は... 義家のそのせ

かたごまごのゆに及みへきかりと愚に口説ふの恨

あつて思ひあつちんと嘆り言る事なすき海

かり... 後の少姓が幽霊何れりきあつち人乃

目了る... ば男女も... 恐まあへりかる所に

嫡子求馬殿いりりゆり... 件の幽霊毎夜出

て夜伽の多く居る中より通る... 捕へんとす





ちくハ今<sup>ま</sup>前<sup>まへ</sup>の妙<sup>まう</sup>多<sup>た</sup>と生<sup>な</sup>て見<sup>み</sup>せよけ恨<sup>うら</sup>と返<sup>かへ</sup>  
らんとして井<sup>い</sup>の傍<sup>かた</sup>に前<sup>まへ</sup>草<sup>くさ</sup>花<sup>はな</sup>をわきまやけあ子<sup>こ</sup>  
又<sup>また</sup>うらに悪<sup>あく</sup>く生<sup>な</sup>出<sup>で</sup>たり奥<sup>おく</sup>もこれとるぬひと  
憎<sup>にく</sup>き志<sup>し</sup>もがや我<sup>われ</sup>とのふいふと女<sup>め</sup>も又<sup>また</sup>井<sup>い</sup>の傍<sup>かた</sup>に  
落<sup>お</sup>して報<sup>ほう</sup>さへくまうり女<sup>め</sup>人が怨<sup>うら</sup>みけりはつ  
い出<sup>い</sup>て孫<sup>まご</sup>市<sup>いち</sup>女<sup>め</sup>夫婦<sup>ふうふ</sup>で初<sup>はつ</sup>めとの執<sup>しやく</sup>業<sup>ごう</sup>はやくと  
少<sup>す</sup>あつた九<sup>く</sup>報<sup>ほう</sup>し多<sup>た</sup>る内<sup>うち</sup>諸<sup>しよ</sup>尊<sup>そん</sup>に祝<sup>しゆ</sup>願<sup>がん</sup>く大法<sup>だいほう</sup>  
秘<sup>ひ</sup>法<sup>ほう</sup>と修<sup>しゆ</sup>し多<sup>た</sup>れと更<sup>さら</sup>く駿<sup>せん</sup>りてついでに  
甲<sup>か</sup>州<sup>しゆ</sup>の知<sup>ち</sup>りふりし菊<sup>きく</sup>寺<sup>じ</sup>として一<sup>いつ</sup>宇<sup>う</sup>建<sup>けん</sup>まし

さくすり吊<sup>た</sup>ひゆりしがと狂<sup>くる</sup>も心<sup>こころ</sup>づりし悪<sup>あく</sup>人<sup>にん</sup>の  
そこの彼<sup>か</sup>寺<sup>じ</sup>す灯<sup>とう</sup>多<sup>た</sup>くかきぬ悪<sup>あく</sup>人<sup>にん</sup>死<sup>し</sup>すべし  
まの飯<sup>いひ</sup>の湯<sup>ゆ</sup>を乞<sup>こ</sup>て湯<sup>ゆ</sup>桶<sup>づく</sup>す二三<sup>にさん</sup>吞<sup>の</sup>み  
あすりあすりも同じ<sup>おな</sup>し悪<sup>あく</sup>也<sup>なり</sup>詮<sup>せん</sup>あつて  
出家<sup>しゆ</sup>し悪<sup>あく</sup>ひも悪<sup>あく</sup>しやど逃<sup>のが</sup>まやつて  
一<sup>いつ</sup>ぞあやしく滅<sup>めつ</sup>び果<sup>は</sup>て今<sup>いま</sup>ハ他<sup>た</sup>家<sup>け</sup>より名<sup>な</sup>跡<sup>あと</sup>を  
ほぎよひしとら  
息<sup>いき</sup>女<sup>にょ</sup>ひしう坐<sup>ざ</sup>像<sup>ざう</sup>やそそ怨<sup>うら</sup>ちつ  
戸<sup>こ</sup>川<sup>がわ</sup>肥<sup>ひ</sup>後<sup>ご</sup>ちの四五<sup>四五</sup>柴<sup>しば</sup>の息<sup>いき</sup>女<sup>にょ</sup>の乳<sup>ちち</sup>母<sup>ぼ</sup>と耕<sup>こ</sup>人<sup>にん</sup>



故<sup>レ</sup>りて人<sup>レ</sup>り討<sup>レ</sup>ちりけりやの<sup>レ</sup>ら討<sup>レ</sup>手にひらひ  
一<sup>レ</sup>番<sup>レ</sup>友<sup>レ</sup>て誘<sup>レ</sup>て松原<sup>レ</sup>とよ取<sup>レ</sup>め湯<sup>レ</sup>入<sup>レ</sup>て燈<sup>レ</sup>を  
と<sup>レ</sup>りて<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>けり<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>塚<sup>レ</sup>あり<sup>レ</sup>けり<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>人<sup>レ</sup>が  
あり<sup>レ</sup>也<sup>レ</sup>むし<sup>レ</sup>討<sup>レ</sup>手に<sup>レ</sup>ひ<sup>レ</sup>ひ<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>先<sup>レ</sup>後<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>り  
塚<sup>レ</sup>のお<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>む<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>け<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>しく<sup>レ</sup>馬<sup>レ</sup>上<sup>レ</sup>より<sup>レ</sup>飛<sup>レ</sup>たり  
心<sup>レ</sup>ひ<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>刀<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>抜<sup>レ</sup>き<sup>レ</sup>何<sup>レ</sup>葉<sup>レ</sup>女<sup>レ</sup>世<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>け<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>し<sup>レ</sup>時<sup>レ</sup>ど<sup>レ</sup>と  
討<sup>レ</sup>ち<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>し<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>獸<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>切<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>り  
連<sup>レ</sup>の人<sup>レ</sup>ね<sup>レ</sup>ど<sup>レ</sup>ろ<sup>レ</sup>き<sup>レ</sup>ユ<sup>レ</sup>ハ<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>程<sup>レ</sup>な<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>あり<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>や<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>制<sup>レ</sup>  
し<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>れ<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>頃<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>伏<sup>レ</sup>倒<sup>レ</sup>き<sup>レ</sup>絶<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>死<sup>レ</sup>に<sup>レ</sup>あり<sup>レ</sup>業<sup>レ</sup>樂<sup>レ</sup>へ

ま<sup>レ</sup>ぐ<sup>レ</sup>に<sup>レ</sup>獲<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>日<sup>レ</sup>只<sup>レ</sup>今<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>塚<sup>レ</sup>より<sup>レ</sup>集<sup>レ</sup>人<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>れ<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>互<sup>レ</sup>  
了<sup>レ</sup>切<sup>レ</sup>詰<sup>レ</sup>ひ<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>我<sup>レ</sup>ハ<sup>レ</sup>背<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>切<sup>レ</sup>き<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>袈<sup>レ</sup>裟<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>  
黒<sup>レ</sup>血<sup>レ</sup>凍<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>甚<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>痛<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>脛<sup>レ</sup>に<sup>レ</sup>け<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>終<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>死<sup>レ</sup>に<sup>レ</sup>  
あり<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>ん

丈夫<sup>レ</sup>如<sup>レ</sup>妻<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>怨<sup>レ</sup>影<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>又<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>終<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>死<sup>レ</sup>す

伊<sup>レ</sup>井<sup>レ</sup>掃<sup>レ</sup>部<sup>レ</sup>頭<sup>レ</sup>殿<sup>レ</sup>の家<sup>レ</sup>居<sup>レ</sup>西<sup>レ</sup>に<sup>レ</sup>伊<sup>レ</sup>豫<sup>レ</sup>の内<sup>レ</sup>室<sup>レ</sup>嫉<sup>レ</sup>妬<sup>レ</sup>係<sup>レ</sup>  
し<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>ほ<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>病<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>身<sup>レ</sup>海<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>し<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>幽<sup>レ</sup>影<sup>レ</sup>毎<sup>レ</sup>夜<sup>レ</sup>  
戌<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>刻<sup>レ</sup>より<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>ん<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>一<sup>レ</sup>家<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>初<sup>レ</sup>め<sup>レ</sup>細<sup>レ</sup>下<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>法<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>  
す<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>代<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>お<sup>レ</sup>伽<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>れ<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>地<sup>レ</sup>の人<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>れ

大坂陣了名せりしせし一勇士了てしつ成天魔  
せし擡んとおひし勢うれを幽冥まるといひし  
く又轉るし目くらめき笑ひびアツトよて俯伏  
了成りし所の田舎本家まゝり居るに件の如  
見し一庄まゝの云く士の妻まゝるん人のうし  
らまゝと見えしより以て此の縁ありと詞を掛  
られし一庄振るるもてしにいと笑し一庄の  
件のよりハヤミ一かど仔細やをばらき終り早ゆ  
まゝ一庄のまゝハ軍法の達人なりと人々感あつこ

一庄の  
死尸人了附て念と告

松平土佐守殿はるの上屋敷の所長ヤ了候ハ  
やうすず者或ハ成する人もありまゆのあはく  
おひりしりまも部屋にゆりしに詮方なくして  
喜三郎といふ人候し家来了れつてまゝ  
口より一庄の國は十たあを妻たりまのりの科  
て刑罰了値しりままバかなし自ハ女のする  
何の子細せし者と同罪了たにらし  
まゝひ候し頸を斬り了けぬき、磐石や上り



貴き吊ひつりてようまかぬをすゝし 拙人何のゆく  
りならうまし

勇士の止翹倭人の誹と恨じ

下總岩手邊の城主を君彦たる所負伏見籠城乃付

家来の原川孫平次ハいしき武勇にして所し

終るる為城の時討たしありとや子息左京を

奥州岩塚了今をかりし時所の由の由がう

孫平次が元印定て花やうらん一印のえ所ハ

いしきやうまし 再侯考を無きとあくとよ人のい

よく殿のやむ程のりハゆるゆぐ 定て儘塚などよ

え向つて成はるやと嘲り笑てあつてひと

嫡登之助親を傲つて親とくくと睨み紙を

誰ととり原川孫平次を某武道ハ日暮る

殿のおつて倭なる挨拶堪忍うがし 女を

り報さんて先け者や報しおろいさんと

口をうるまをたあ大了おどろきおそれ某誤

極やうとよと招徒言し ぬれ湯のたそ日蓮

仏の大法寺やみ孫寺しうだぬ眼とい



八月中旬新居の大坂へ引越んとて母を先  
立て同職の者依人の坊へ合了置下りし  
の妻も相親ありやの者も成せし人の所し  
最下りきと思ひさすちふら物置し頓て大坂  
了流んと是しき付伴の丁より何れへは  
余の同職の者も尤りもせし肝と申しあり  
其者ほひしハはりそめくし新居よりせ  
とて東越へ引下りありし其のりれし  
道へは新居の舟に發焚しして往く或る人

活霊咽と占

江戸靈巖嶋徳作の棚を築き家の出入者  
を兼とふ者も久しくありて同一家の店や  
大坂より猶子と呼下りあり其者ハ利根お覺  
りて痛やもよくせしなりと云ふ煩しと云ふ  
も不審なりと申し若き者のありれを何れも  
是れものなりや幾人合浪ではるも若き  
何れももれなきと云ふ事ありしなり  
我れもいふ事ありしなり此家の書置は



誰れを寐入んとぞれを咽とぞんぞくふり  
ひるやのけり声れ心亡き糸ねとなき平にけぬる  
女の徳慕にそふもあつたにけり子細るべし  
いそぎの由とあまの昔もれと大上肝とほ  
まやうびのけりけりいふよのむじや包に  
けれと責しけり妻をそとへ今ふゆと隠さん  
かの者の高きくしとゆごと利後あまのけり  
家をけりけりバ初まハ不調法よのけりけり  
仕負家ともしろけりけりけりけりけりけり  
けりけりけりけりけりけりけりけりけり

とけり一念ぐりけりけりけりけりけりけり  
僻りけりけりけりけりけりけりけりけり  
せんけりけりけりけりけりけりけりけり  
そのおしきけりけりけりけりけりけり  
けりけりけりけりけりけりけりけり  
先走招呼けりけりけりけり  
けりけりけりけりけりけりけりけり  
けりけりけりけりけりけりけりけり  
けりけりけりけりけりけりけりけり

後つとゆ所ぐきうと睦しくすへしはたきも  
ぞりの志しやと懐いて絶る身はく度し程で  
もつとゆあれど人々のとやうひと道れやうと神田  
瀧野丸屋を去るとし者のかくの嫁しきりやと氣  
三回忌のつとまじしとて妻進言をど憚りきり  
不ふとも上りいりしととれへゑるぞと云ふれど  
去氣げして何のせ云にや差りても又し中  
問へし是ハ此の先夫のやと氣まうてよく悔い  
ぬれと叫招れしと夏又しとされたり

しや扱も胸うりしとて病つと大勢たうりまハ言  
しして三日ぬりしとて寛文子中のあつと  
先妻魂といふは

常州言はきの家女はしとまのきあに仕へけし  
武夫なりし後つと名と横田保菴とてつとめ醫師と  
るり車れをもきりてゆりて居居候とて先  
國りやにさしとてはとてし妻のりしおひり  
愛する人の媒も黙止つてて又新妻とてさし  
後つとゆとかの妻やうりもいし嫉妬乃



と心術怨弄了らひいりやとよ愛了らて保菴を教  
してハ初と一分刻に先を殊へて了るのみにせし  
のや理と致してあぶや一に罪もいと重し一  
まら海も人にもあつぬき縁ははきぬるやいや又  
あつてついで日更しぬいほむてあつはりのいり  
告うしあれど急急の者もあつにこの果れの人  
ひりし能く保菴了ら回心し一善の媒ちしと  
ゆももいりてハ至極し一罪了らてとあつた  
なると合してあつはりへあつし一に罪もあつた  
と

也保菴ハ福多し保ひ成りて成りてあつはりの元福  
十もあつたの比してあつし一とあつた  
下里 畷婦 蛇くさる 潜毒 家と去  
江戸芝田町八町目紙屋右急妻夫と恨じりとの  
はもと煩て終りし身あつて一とあつた  
成覚寺了らつたつて一とあつた  
うが藩國の下了らつたつて一とあつた  
おもはつてあつたつて一とあつた  
報さるるあつたつて一とあつた

是の家に入るとも、嘆き合ひて、たゞ家の内を  
也の形を成りし、平九日、色もしく、  
おいて、至く女と呼入し、に聖朝女進之り  
と、  
きりも、  
下野那須野の内下畦田村の助八と云者、父ハ、  
て、  
女今くの、

継子母とて、恨霊子と懣す

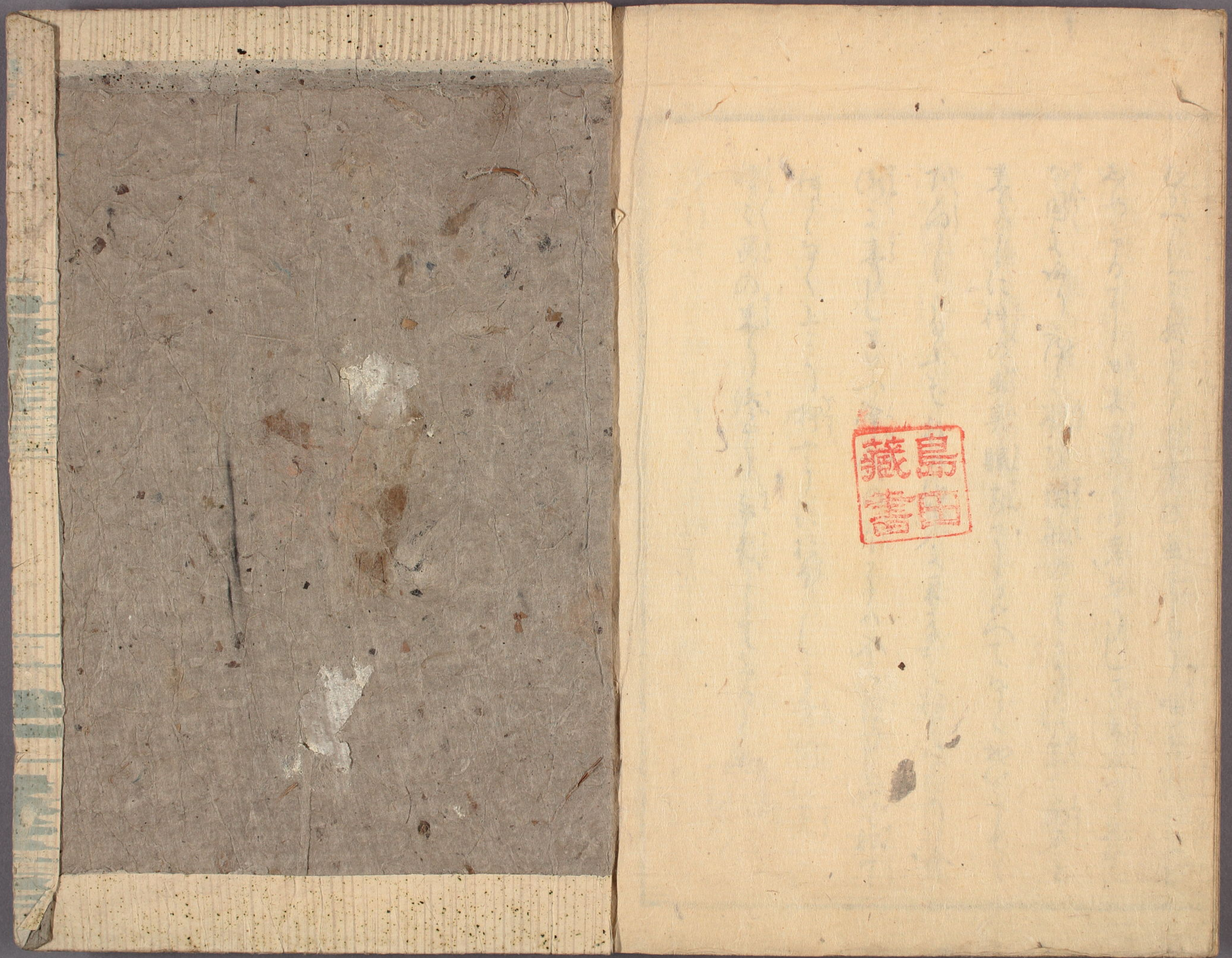
下野那須野の内下畦田村の助八と云者、父ハ、  
て、  
女今くの、

教い、  
毎夜、  
山、  
妻、  
伊豫國、  
後、

妻の魂、

しとくまむらうおまの幽霊まう咽より  
あめちりす日ま勇らり者なりしは氣力つれ  
中固くゆり序願ひ関船のまよりいふ  
まうしに件の幽霊眼あすはてはと神  
下向くまふを初ハ望人よりまて  
あままうしとよ餘人の取入らざりし  
何とまうし上より押すに  
時く霊のまうし終へて  
あまのまうし終へて





島田藏書

